

第 5 章 国民投票のパラドクス・スイスは「理想の国」か (131-159 頁)

本章のねらい

- ・デモクラシーの論理を究極的に体現した国民投票が制度化されたスイスで、まさに国民投票をてことして、ポピュリズム政党が伸長を果たしてきたことを明らかにする (131 頁)
- ・スイスの国民投票制度を概観し、ポピュリズム政党がどのようにして国民投票を用い、政治的存在感を高めたのかを検討する (135 頁)

1. 「てこ」としての国民投票 (131-133 頁)

- ・国民投票を求める主張はポピュリズム政党の主張と「共通の根」 (133 頁)
→ 既成政治や官僚組織に任せるのではなく、国民が直接意思決定に関わるべき

2. 「白い羊」と「黒い羊」 (133-135 頁)

- ・2007 年の国民議会選挙における挑戦的ポスター
→ 「スイスを象徴する動物を用いつつ、外国人を社会不安や犯罪と結び付けたうえで、彼らをスイスから排除しようという主張」 (133 頁)
- ・スイス国民党が作成：スイス国民党 → 排外主義的政策を実行

3. 「理想の国」スイス (135-137 頁)

- ・「平和と民主主義」の実現した国スイスというイメージ (135 頁)
- ・安部磯雄『地上之理想国瑞西』：「真正の自由民権」が発揮された「純粹民主主義」の国 (136 頁)

4. 三種類の国民投票 (137-140 頁)

- ・国民投票制度発展：スイスでは成立の歴史的背景から「中央政府が強力な権限を持つことに対する警戒感が強かった」 (138 頁)
- ・国民投票の種類
「義務的国民投票」：「国の根幹にかかわる重要事項について」 (138 頁)
「任意的国民投票」：法律や条約などの可否について
「国民発案」：憲法改正について・「究極の民主主義」 (140 頁)

5. 国民投票による脅し (140-143 頁)

- ・「国民投票の脅し」：野党は国民投票で憲法改正や立法に異議を唱えることができる
→、国民投票が減少し政治が安定
- ・「協調性民主主義」の誕生

6. スイス政治の動揺と国民党 (144-146 頁)

- スイス政治の動揺：社会変化による「支持層の流動化」で党員数の減少 (1960 年代か

ら) →政党の「代表性」の喪失 (144 頁)

スイス国民党の躍進：クリストフ・ブロッハーが中道保守政党から反既成政党路線へ

7. AUNS という原動力 (146－148 頁)

- ・ AUNS (スイスの独立と中立のための行動)：あらゆる国際組織への加盟に反対
- ・ ブロッハーは AUNS の指導者として有権者に訴えやすいテーマで全国にアピール

8. ブロッハーによる右傾化 (148－150 頁)

- ・ ブロッハーらが党内勢力を穏健派から奪い (1996)、急進化で勢力拡大
- ・ 3つの主張：「政治エリート批判」・「スイスのアイデンティティの保持」・「移民批判」
(149－150 頁)

9. ミナレット建設禁止 (151－153 頁)

10. 「反移民」案の可決 (153－155 頁)

11. 国民投票のパラドクス (155－157 頁)

- ・ 「国民投票のパラドクス」：「協調民主主義」自体が人民の主権を不当に侵害している
と見なされ、ポピュリズム政党によって国民投票を通じて攻撃されている
- ・ 「諸刃の剣」：国民投票では、議会では受け入れられないような急進的政策であっても
実現可能であり、「純粹民主主義」を通して「不寛容」が**正統化**お墨付きを得ることになる

国民投票による政治で不安定を恐れ、与党が野党を取り込み、協調政治を行う→談合政治、人民の意見が代表されなくなる。直接民主的意図のある国民投票が逆に民衆の意見の政治反映を妨げかねない。

12. 国民投票の「保守的」機能 (157－158 頁)

- ・ 「保守的」：「現状を変更しようとする提案が挫折する可能性」がある (157 頁)
- ・ 「国家からの自由を守る」ために国民投票が活用されることで「国家による保護」の
発展が遅れる (158 頁)

13. 白い羊たちの民主主義 (158－159 頁)

- ・ 「白い羊たちの民主主義」：積極的な移民排除や右派ポピュリズムに賛同しない人々が、
無関心を装うことで事実上は急進的政策を支持している
- ・ 「スイスは、その純粹民主主義的な制度のゆえに、ポピュリズムによる先鋭的な主張
が有効に作用する民主主義でもあった」 (159 頁)